

「この日イエスはうまれた」

ルカによる福音書2章8－20節

森島 牧人 牧師

教会の暦では、11月最後の日曜日・感謝祭でその1年が終わり、次の日から新しい1年が始まります。その始まりの日からクリスマスまでの4週間がアドベント（待降節）で、クリスマスの準備をしながら過ごす期間となっています。その期間を経てクリスマスを迎え、私たちは主イエスと共に新しい1年を歩み始めることとなります。

アドベントに入ると同時に、私たちはルカによる福音書を通して主イエスの誕生について学んで来ました。今日も前回に続いて、ベツレヘムの郊外にいた羊飼いたちの上に主の栄光が現れるという場面から学びたいと思います。主イエスの誕生、それはヨセフとマリアが住民登録のためにナザレからベツレヘムへ入ったところで起こった出来事でした。私たちがよく知っているこのことを頭に置きながら、主の栄光が羊飼いたちの上に現れる場面を読んでいると、私たちの中に一つの疑問が生じます。皇帝の勅令が全領土の住民に対して出されたものであったはずなのに、いつもと変わらず野宿をしながら、羊の番をしている羊飼いたちがそこにいるからです。彼らは何故住民登録のために急いで移動しようとしないうかという疑問が、私たちのなかに生まれます。しかし、この疑問の答えは簡単で、彼らが「住民」の範疇に入っていない存在であったということです。登録の必要などない、いてもいなくてもよい人々、そのような範疇に羊飼いたちは置かれていたのです。

ところが、驚くべきことに救世主誕生の最初の知らせは、数の外とされていた彼らの上に届けられたのです。これは、神が社会的に見捨てられた名もない貧しい人々のところを選んで、そこにご自身の栄光を現されたということに外なりません。このことは私たちに、教会に託されている宣教が、このようになされなければならないことを教えています。教会はこのような人々のためにこそ、存在していることを忘れてはならないのです。

この場面でもう一つ、不思議に思えるところがあります。「主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。」（ルカ2：9）と聖書にあるところです。主の栄光に照らされるという喜ばしい状況下で、何故羊飼いたちは恐れたのでしょうか。「主の栄光が周りを廻る」という状態・・・これは単に喜びで満たされるというようなものではないのかも知れません。「神の栄光」とは旧約聖書では重い・力があふれていると言った意味があり、新約聖書では評判・値打ちなどとなっています。「神の栄光が現れる」とは、<神の臨在による権威に満ちた力が周りに重々しく充満していて、その豊かさを讃える言葉で満ちあふれている。>というような世界でしょうか。その圧倒的な神の力による支配は、その場にいる人間に喜ぶことを忘れさせ、恐怖を抱かせてしまうほどのものなのかも知れません。いずれにしても、そのような人間の生活のただ中に、神の約束通り、この日主イエスは人間としてお生まれになったのです。

出エジプト記にあるイスラエル、神の民は、遊牧民でもあり、エジプトからカナンの地までの長い旅には、毎日の移動が終わると、いくつもの天幕（テント）が張られました。そしてその中には、常に民を導き、支えてこられた神の天幕（神のテント）も張られていたのです。つまり、常に神の民の直中に、そこに神は共にいて下さったのです。

クリスマスを迎える、私たちの教会の中心にも、また私たちの家族の中心にも、そして私たち自身の心の中にも、主は、私たちと共に居て下さる、インマヌエルの神であるのです。今日、このクリスマスの時、どんな時も私たちと共にいてくださる主をお迎えした私たちは、この新しい1年を、主と共に歩み始めましょう。